울림（ウルリム）（響）

聖公会生野センター機関誌

第20号

2001年8月10日発行

題字：康秀峰

E-mail:ikuno.po@nskk.org　URL http://www.nskk.org/province/ikuno

国（こっか）・家から市民・個人へ

姜恵楨

「新しい歴史教科書をつくる会」が編集した教科書が文部科学省の検定に合格したと報じるニュースに接した時、悲しみと恐怖を覚えた。信頼関係を築きたいと願う相手が全く別の方向を向いていると思えた時の悲しみ、その相手がこれから何をするか分からない、自分を攻撃してくるかもしれないと思えた時の恐怖に、その感情は近い。この数年間の日韓関係がゆっくりでありながらも友好的な方向に進んでいるように見えていたことを考えると、一歩進んだ日韓関係が三歩下がったような状況に思えて残念だ。

「つくる会」の教科書は、閉鎖的国家主義や皇国史観をベースに、歴史的事実を隠蔽・歪曲し、日本が起こした戦争と植民地支配を美化する内容となっている。こういった教科書が登場し、日本の教育現場での選択肢の一つとして存在を許されていることは、たとえそれに賛同する人が数としては少数だとしても、日本社会が過去の歴史に対してはっきりした原則を確立してこなかったことの現れのような気がしてならない。ドイツでは、ナチのホロコーストが存在しなかったという発言に対し、法的な制裁が加えられたと聞く。歴史認識において絶対に譲ることのできない明確な線が、日本社会の中でしっかり共有することができていたなら、このような教科書が世に出ることができていただろうか。日本が過去の歴史の歪曲や政治家の妄言を行う度に、韓国が批判をし、日本の政治家が撤回する･･･両国にとって不幸なこんなことの繰り返しは、もう終わりにしたい。歴史認識の問題はその社会の哲学や思想に関わる問題で、本来のそれは外交問題ではないはずだ。

この間の歴史教科書認識の問題は、基本的には日本の未来に関わる問題だと思うが、アジアの国々にとっても不幸な影を落としかねない。誤解を恐れずに書くと、教科書問題をめぐって日本に対するアジアの国々からの批判の声が高まっている中で、事態が好転しないまま状況が続いた場合、それぞれの国の中から排他的なナショナリズムの傾向が強まってきたりはしないかという心配で、私は気が重い。ここ十数年、冷戦の崩壊とともに東アジアにおける自由な対話を拒ませていたイデオロギー対立が取り払われてきたように思うが、それに代わるものとして偏狭なナショナリズムを登場させることのないよう、その登場に正当化の口実を与えることがないよう、日本がアジアと共有できる歴史認識を築いていくことを願う。また、そのための努力は、韓国社会に属した者としても、自分への課題として課していきたい。

80年代の初めに起こった日本の歴史教科書歪曲事件と同じことが、20年後に繰り返されているという残念な状況ではあるが、当時との明らかな違いから大いに励まされたことがある。80年代当時と比べ、このような問題が起こった時に手を取り合える日韓の市民交流は相当進んでいるという点だ。教科書問題に取り組む韓国の市民の手元には、日本の市民から教科書採択に関する各地の状況が毎日速報として届き、共同の取り組みも様々な形で行われた。そういった関係こそが状況を切り開く力と信じ、大切に育んでいきたい。

（かん・へじょん　翻訳業・韓国在住）

大きなものと小さなもの・・・改革が叫ばれる中で…

呉 光 現

「改革」叫ばれた参議院選挙の最中にイタリアのジェノバでサミット（先進国首脳会議）があった。グローバリゼーションに反対する集会、デモが混乱し死者まで出てしまった。1997年のアジア通貨危機の際もそうであったが、一国の経済が国際金融資本の動向によって簡単に破綻してしまう21世紀の世界経済とはいったい、いかなるものであろうか？ここ日本でも「構造改革」による「痛み」が当然のようにいわれている。しかしその痛みは弱者にいくのは明らかであろう。私は弱者というとき経済的弱者や社会福祉が必要な人だけとは思わない。

生野で働いて20年近くなるが、最近、在日韓国・朝鮮人１世の生活破綻を目の当たりにすることがしばしばある。簡単にいうと年金のない（受けることのできないといったほうが正確かもしれない）在日１世は老後を過ごす蓄えが必ずしもあるとはいえない。多くの場合は子ども達（息子の場合が圧倒的に多い）に経済的に依存している。バブル経済がはじけて10年くらい経ち、生野地域の在日の生活は大変である。これまで親の経済的な生活を支えてきた子ども達が生活の支えをできなくなっていることをまま見る。そうすると年金のない１世の生活はたちまち破綻してしまうのである。

本名で働いていると、さまざまなところから相談がやってくる。その大半が在日韓国・朝鮮人である。必要な社会福祉の制度を適用できるように相談業務をしながらもやはりこれは「歴史を忘れられない」と痛感せざるを得ない。

朝鮮人として植民地時代に渡日し、民族差別賃金をはじめとして日本の底辺で生きてきた在日の１世のほとんどすべてが社会保障から除外され、その結果、不安定な生活を余儀なくされている。まさにここに「生きた歴史」があるのではないだろうか？いよいよ人生の最終章を迎えた在日の１世がこのまま消えてなくなるのを日本社会はまっているのだろうか？いまさら歴史云々はいいたくない気もあるが、日本の構造改革はやはりわれわれ在日を排除して進んでいくのだろうか？

超高支持率の小泉総理の就任とともにといっていいほど歴史教科書を始めとして靖国神社参拝問題など、新しくて古い歴史課題が東アジアで沸いてきた。彼は言う「参拝後に考えましょう」と。何を言っているのだろうか？まさに在日の１世がすべて世を去ってから考えましょうと同じではないか！今必要なのは声なき声に耳を傾けることではないだろうか。歴史教科書が、靖国神社問題が今の課題として捕らえる感性があるならば違った行動ができるであろう。

改革はまさにこれまで置き去りにしてきた人々をまた置き去りにしてはならないと思う。まさに戦後日本が構造的に無視してきたものに向き合い「構造改革」をせねばならないだろう。今一度、日本はアジアの一員であることを思い起こしてほしい。

今回の選挙ほど選挙権がないことが悔しかった選挙はなかった。私（たち）の意志がやはり反映されなかったからでる。ただ、ひとつの灯りはある。地道な草の根の動きとつながりから「グローバリゼーション」「構造改革」が決して「大きなものが小さなものを飲み込んではならない」と信じて行動に起こす人々が世界中に居るということだ。私はまだ出会っていないそのような人たちと繋がって働いていけることを誇りに思いたいと思う。

（お・くぁんひょん　聖公会生野センター主事）

もくじ

1・国・家から市民・個人へ
2・時のしるし
　大きなものと小さなもの
　　改革が叫ばれる中で
3・本から在日コリアンを考える⑥
　『友と愛、そして母
　　―ある在日朝鮮人一世の心に残る人々』
4・韓国の地域活動からみた日本の福祉
6・横浜教区友の会解散　そして…
7・パンチョギの家族日記　子どもたちの世界
8・お知らせ　余韻

精神科
神経内科
キム診療所
〒537-0013 大阪市東成区大今里南3-13-13
高クリニックセンター３F
TEL(06)6973-8282 FAX(06)6973-7733
近鉄今里駅から徒歩3分
診療時間

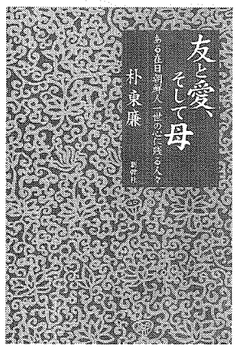
受付時間	月	火	水	木	金	土
AM10:00 ～PM1:00	○	○	／	○	○	○
PM 4:00 ～PM7:00	○	／	／	○	○	／

日曜・祝日は休診

本から「在日コリアン」を考える⑥

高 二 三

友と愛、そして母
―ある在日朝鮮人一世の心に残る人々



朴 東廉（パク トンリョム）著
定価2800円＋税
新幹社発行

1998年４月、『物理学者 金徳洲』という本を作ったことがあった。この本は前年４月に死去した金徳洲先生の追悼集である。金徳洲先生は東京大学大学院で物理学を専攻し、マサチューセッツ工科大学研究員を経て、青山学院大学で教鞭をとっていた世界的な学者であった。だが、専攻が物理学ということもあって、在日朝鮮人社会ではあまり知られていない。しかし、本書を読めば、金徳洲という人物が、祖国、民族、家族、友、etc...にどれほどあつい思いを抱いてきた人かよくわかる。

この『物理学者 金徳洲』を作った時、その中心メンバーの一人が今回紹介する『友と愛、そして母』の著者、朴東廉先生であった。朴東廉先生は自ら「……生涯の友人であった金徳洲君が急に他界し、そのことは私に強い衝撃を与え、わたしの心に大きな空洞を生じさせた。そしてそれ以来私の脳裏には常に彼との交流の追憶が去来してやまなかった。そこで私はついにその追憶を文章として書き残すことに思い至り」（あとがき）と述べている。つまり本書は『物理学者 金徳洲』の延長線上につくられたものといえる。

著者は、済州島で1927年に生まれ、幼少のころに日本に来て、一時帰国して再来日、大阪高校→東大へと進み、数学を専攻して朝鮮大学校の教員となった経歴の持ち主である。植民地支配→戦争→解放→戦争→分断という激動の現代史を生きてきたわけだが、淡々とした文体の中に熱い思いが感じられるのは、著者が数学者であるからだろうか。

東京大学に入学した著者は、東大駒場寮の数学研究会の部屋で暮らし始める。そこでの二年間に多くの日本人の友人を得た。本書の「跋文」を寄せて下さった上野正東京大学名誉教授もそのうちの一人である。手塚治虫を中心とした若手漫画家たちの拠点であった「ときわ荘」物語はよく知られているが、東大駒場寮の数学研究会は若手数学者の拠点となっていて、「ときわ荘」を彷彿とさせ、いまはなくなってしまった東大駒場寮の雰囲気を伝える貴重な証言となっている。

もちろん本書の多くは金徳洲先生をはじめとする朝鮮人学友との友情がすがすがしく描かれている。誰もが見事なほど貧乏であった。それでもなお、祖国と民族を思い続け、勉学に励んでいた青春時代であった。家族が別れ別れで生きていた。離れて暮らしている分だけ、思いがつのるのだろうか。さりげない文体の中にも、緊迫した時代と、愛しい人への思いが伝わってくる。

著者がいかに正直者であるかがわかるのは、「幼なじみ」から始まる「愛情篇」である。好きだった女性たちの思い出を綴ったものだが、勉学に励みながらも異性への思いを断ちがたく、ほろ苦い思いをしながらも人として成長していく様が描かれている。

在日朝鮮人一世の誰もが同じ境遇にありながら、しかし著者は奇跡的に学問の世界で生きてきた。そこには著者自身の努力はもちろんのことだが、母親の献身的な愛なくしては成就しえないことであった。若くして夫と別居を余儀なくされた母は、次男である著者にすべての愛を注ぐことによって生涯をまっとうしたといっても過言ではない。母の最晩年、済州島へ帰郷する母を見送る息子である著者の断腸の思いは、分断時代の矛盾の集約以外のなにものでもない。済州島の女として生を享け、済州島へ帰っていったたった一人のかけがえのない母の人生もまた、著者にとっては必ず書き残しておかねばならなかったにちがいない。

（こ・いーさむ　新幹社代表）

『友と愛、そして母　―ある在日朝鮮人一世の心に残る人々』　は聖公会生野センターで取り扱っています。

TEL 06-6754-4356　FAX 06-6754-4357
e-mail : ikuno.po@nskk.org

韓国の地域活動の現場から見る日本の福祉

大韓聖公会分かち合いの家　現場スタッフ関西研修

聖公会生野センターとのつながりの深い大韓聖公会分かち合いの家の現場スタッフの徐会英(そ・うにょん)さん・高明善（こ・みょんそん）さんが5月～6月の1ヶ月間、研修に来られました。2人は分かち合いの家のスタッフとして5年間働いてこられたので、この研修では韓国の状況と比較しながら多くの事を感じ、学ばれました。今回の研修では、高齢者福祉の現場として尼崎市にある園田苑と、知的障害者福祉の現場として生野地域にある出発（たびだち）のなかまの会を訪問しました。いずれも、先駆的な活動を行っているところです。韓国の地域活動の現場から見る日本の福祉として、徐さんの研修レポートを掲載します。

徐 会 英

尼崎・園田苑　老人福祉の現場から

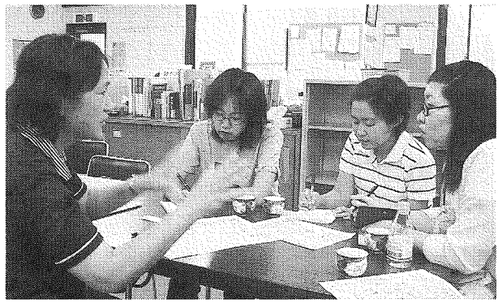
かなり以前から高齢化社会となっている日本は老人福祉の分野が非常に進んでいると知っていたので園田苑での研修をなによりも期待していました。

老人福祉分野の研修では、老人を対象にした日本の社会保障制度の断面を見ることができる機会が与えられることと、そのような日本における社会保障の水準を直接、現場で働くスタッフとサービスを受ける老人に会うことによって、その福祉サービスのあり方を直接経験することができることを期待していました。

今回訪問じた園田苑には、特別養護老人ホーム・グループハウス・地域センターがあり、地域社会の老人を対象に、あらゆるサービスが安心して受けられるように提供されていました。

家庭でサービスを受けようとする老人にヘルパーを派遣し、また、利用者が希望する日にはデイケアセンターで時間を過ごすことができるようになっています。また健康が 悪化すれば 特別養護老人ホームを利用することができるようになっています。

園田苑ではヘルパーの活動を中心に研修をしました。ヘルパーはヘルパーの考えのみで行動しより決定はしませんが、予定している時間内に老人を訪問するという規則性が正確にあるということ、利用者の負担とならない親切さと、老人の視線にあわせたサービス精神、そして清潔に感動を受けました。



施設長の中村大蔵さんは園田苑のヘルパーは立派だと 話され、老人に接するヘルパーはプロとしてかかわっていました。

日本の始まったばかりの介護保険制度でヘルパーの質の問題がこれから起きるだろうという話がありましたが、老人の介護のためのヘルパーが一つの職業として認知され、その財源があるということはうらやましいことと言わざるをえません。

韓国の場合ヘルパー(無料看病人, 家庭奉仕人 等)の助けを受ける対象は、ほとんどの場合一人暮らしや貧困の老人に限定されていて、ヘルパーにまず要求されることは奉仕の精神です。

また、一人暮らしの老人を訪問する制度がまだ、試験的、一時的に実施されているため、ヘルパーの素養や職業意識が低く、利用する高齢者の満足度は低くなっています。

このような現状の差は老人福祉制度の差にあるということを実感せざるを得なませんせした。

介護保険制度のもとで老人がサービスを選択できる契約の関係と、最低限度の生活さえも保障されられない我が国の一人暮らしの老人が受けるサービスの水準は明らかに大きな差が存在します。

老人福祉研修を通して、我が国の現場では容易に 感じていない社会保障の意味を近くから体験できる 機会でしたが、日本でも課題を抱えているということも分かりました。

韓国と日本の水準の差はありますが、必要なヘルパーの人数を確保するなど、財源の問題はどこでも存在することを実感しました。

尼崎でなによりも関心をもった体験は阪神医療生活協同組合を知ったことでした。ここは医療制度に当てはまらないケースを対象にして、6年前から「あいあいクラブ」を発足させ、組合員と地域住民がボランティア活動を通して地域社会に貢献しています。一つの理想的なあり方と思いました。

コーディネイターの職員を除いては、弁当サービス, 車両奉仕, 旅行, 家庭訪問サービスなど、皆がボランティアでなされています。

阪神医療生協は 行政の手が届かない部分に対して、行政に依存ぜず、民間の力で、共に暮らす地域をつくりだしているということに大きな意味があると思いました。阪神医療生協の土台は「地域」ということです。地域内の助けを必要とする人に、隣の人が支えるという事は、共同体意識を生みだし地域の問題を自ら解決しようという力の結集という点で大きい意味があります。

現在私は、分かち合いの家でボランティアメンバーのコーディネイターの役割もしていて、より一層関心を持った活動でした。今後機会があるなら、このような生協で研修を体験したいと思います。

園田苑での一週間の貴重な経験は、あらゆるスタッフ・ ヘルパーが、サービスを受ける老人を最高の顧客として接しているということです。仕事のための仕事でなく、事業のための事業でなく、老人のための事業、老人の意思が尊重され、その過程の中の、プログラムの多様性や個別性に、対処できる充分な人材と細心さを持っていることが、うらやましく感じました。

生野・障害者福祉の取り組みから

老人福祉と障害者福祉との違いを感じたのは、老人福祉の現場では、どのようにすればより良質のサービスを提供でき、どんなものがより効率的かを考えている段階ですが、障害者福祉の現場では、今でも障害者の権利をための運動が必要とされているということ感じました。

障害者が養護学校や施設への入所を勧められる社会的雰囲気によって、障害者が地域社会と隔離されているために、老人の社会保障の水準に達していない障害者の社会保障制度に対する問題などに接することができました。

このような障害者の現実と社会的認識の転換のために障害者福祉の分野で活動するスタッフは障害者と共に生活し、作業しながら持続的な運動を続けている事が分かりました。

特に知的障害者の意思と欲求が無視されるなど、地域社会で自分が望む生活を享受する権利が家族と制度の下に容易に奪われてしまうことに不当さとせつなさを感じました。

我が国と同じように日本もまだ障害者に対する偏見が存在していますが、障害者を支える制度があるというということは大きな差です。

また、障害者が要請して必要性が確認されればヘルパーを使うことができることや障害者年金があることなどは私たちにはまだまだうらやましいかぎりです。

グループホームで生活して作業所に出勤する知的障害者の場合は形態的には家から独立していますが、ガイドヘルパー、スタッフなど毎日毎日の支援が必要で、それがなければ自立生活は保障されてはいません。

身体障害者の自立生活センター「いけいけこいこい」では、障害者が障害者を支えるスタッフとして、仕事をしている人もいますが、この場所以外での社会生活はどうなのだろうかと思いました。

しかしそれでも障害者の自立生活を実現し、健常者と同等に社会の一員として堂々と生活できる障害者の地位を確保しようとするヴィジョンと希望を持って仕事をし、運動していくスタッフの姿が美しく感じました。

障害者に対する誤った偏見がなくなるとき、障害者の自立的な生活も保障されるのではないでしょうか。

(そ・うにょん　蘆原 (ノウォン) 分かち合いの家スタッフ)

外科・整形外科・リハビリテーション科・肛門科
LEE CLINIC 李クリニック
〒544-0001 大阪市生野区新今里2-4-15
ミナヒロハイツ1階
TEL 06 (6751) 0558

診察時間	月	火	水	木	金	土
午前 9:00～12:30	○	○	○	○	○	○
午後 4:00～ 7:00	○	○	○	×	○	×

<休診>　木・土曜日 午後・日曜日・祝日

横浜教区友の会解散、そして……

小山 俊雄

聖公会生野センターとの協働、支援は教区組織としてではなくボランティアとして関わるべきという横浜教区の方針に沿って、「聖公会生野センター横浜教区友の会」は1992年以来、センターへの支援募金の取り次ぎ、日韓関係史の勉強、日韓関係史の足跡をたずねるツアー、関東三教区生野委員会や神奈川外キ連へのスタッフの派遣等の活動を行ってきた。

しかし今年６月に総会で解散を決定して７月に70名余りの会員にその旨をご連絡して活動を停止した。なぜ友の会が解散することになったのだろうか。個人的な見解ではあるが理由を整理してみたい。

①センター後援会の制度が確立してきたので、これまで友の会が仲介していた支援募金業務を後援会に移管して、センターと個人の直接のやりとりにしてもらってその事務作業がなくなったこと。（会員には後援会に加入するようお願いしている）が大きなきっかけになったが、

②役員がそれぞれ忙しく、会員への情報発信が不十分で会員の関心が薄れがちになったこと。

③精神障害者支援グループとの協働の意味が十分理解されないために、会員の意識から離れた存在になってしまったこと。小生個人は「地域に奉仕する」というセンター設立の趣旨通りで全く問題はないと考えているが。

④センターの設立と働きそのものが日本聖公会の戦争及び戦後責任の償いであり、かつ日本聖公会の宣教活動であるということが、十分に納得されて具体的な行動に結びつかなかった。

等の理由で活動が停滞しがちであったので、ここでまず一区切りをつけようということになった。

しかし教区外からは「教区の情報窓口として残せないか」との声を頂き、また友の会内部でも「募金以外の活動は有志でもよいから続けたい」という希望が多かった。私も同感である。

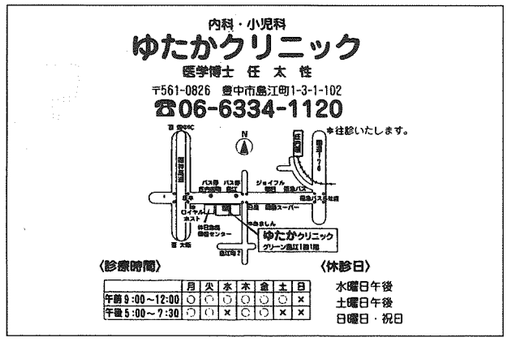
そこで新たに旧友の会会員に呼びかけて「（仮称）在日外国人と共に生きるネットワーク」を立ち上げることにした。当面は役員もおかず情報交換を中心にし、会員の自主的な活動に有志が加わるという形で運営したいと考えている。聖公会生野センターとの関係は「頼まれるから助けてやる」のではなく、身近にこのような働きが行われていることに感謝し、協働してこの世に仕えたい。

聖公会だけでなく超教派の働きをも視野に入れていきたい。

どの位の方が参加されるか分からないが、「在日外国人と共に生きる」それは取りも直さず「在日外国人が日本人と同等に扱われ、その尊厳が保障される」ことがキリストの福音であるとの共通の理解が得られればいいなと思っている。

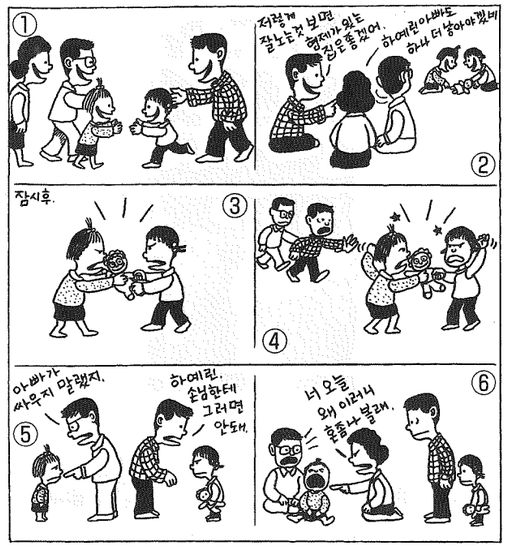
既に日本は多民族・多文化国家である現実に目をつぶり、排外主義や皇国史観によって歴史を歪曲する動きが目立つが、このような時こそキリスト者がこの世に遣わされている意味を再確認する必要があるだろう。

（こやま・としお　横浜聖アンデレ教会信徒）



아이들의 세계

子どもたちの世界



② あんなによく遊んでいるのを見ると兄弟のいる家はいいね

ハエリンアッパも、もう１人産んでみたら？

③ しばらく後

⑤ アッパにけんかしてはいけないと言っただろ

ハエリン。お客さんにそうしてはいけません。

⑥ あなた 今日 どうしてそうなの。しかられてみる？

⑦ こどもたちのけんかなのだから、なにもそこまで。

⑧ 自分の子どもがわたしの子どもに悪い事をしたのに、何もしないなんて。

⑨ 行こう。行こう。家に帰ろう。

作者：崔正鉉（ちぇ・じょんひょん）
パンチョギ（もう一方）の愛称で親しまれる。1960年韓国大邱生まれ。娘の誕生以降子育てをマンガで表現。ユニークな描写と男性優位の韓国社会で家事分担が評価。1995第１回平等夫婦賞受賞。

お知らせ

9.1関東大震災朝鮮人虐殺から78年
聖公会生野センター　第10回共に生きるを考える集い

中学歴史教科書問題で日本社会が問われているもの

今春、日本の植民地支配の歴史の事実を隠そうとするグループによって執筆された中学歴史教科書が教科書検定を通り、アジア諸国の政府や市民団体から大きな抗議の声があがりました。また、他社の歴史教科書もこれまで、書かれていた記事がなくなっていることの課題もあります。

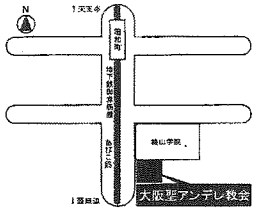
なぜそのような抗議の声が起こるのか。そして、私たちが繰り返し問われていることを改めて知る必要があるのではないでしょうか。

何を知り、何を学ぶのか。本当に大切な事をみきわめる事が、いま必要とされています。

講師　藤永　壯（ふじなが　たけし）さん
（大阪産業大学・朝鮮近代史専攻）

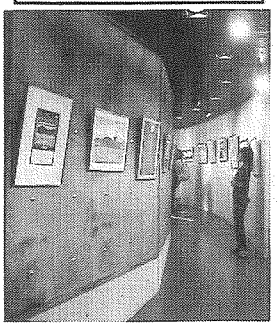
日時　9月9日（日）午後2時から

会場　日本聖公会大阪聖アンデレ教会
大阪市阿倍野区昭和町3-1-57
TEL06-6628-4757
地下鉄御堂筋線昭和町駅より徒歩5分



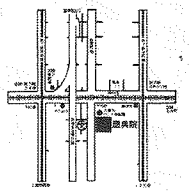
主催・お問い合わせ　聖公会生野センター
大阪市生野区小路東1-17-28　TEL(06)6754-4356　FAX(06)6754-4357
e-mail：ikuno.po@nskk.org　http://www.nskk.org/province/ikuno/

第2回 クリンもだん絵画展



日時　10月7日(日)～14日(日)

会場　應典院
大阪市天王寺区下寺町1-1-27



主催・お問い合わせ
聖公会生野センター　大阪市生野区小路東1-17-28
TEL06-6754-4356 FAX06-6754-4357

余韻

お詫びと訂正

ウルリム19号のご支援くださった方々のお名前の中の後援会費の欄に須佐美浩一さんのお名前がありませんでした。お詫びし訂正いたします。

◆聖公会生野センター横浜教区友の会の解散。これまで学習会や研修など、積極的な活動をされてきただけに残念ですが、これからもおひとりおひとりとのつながりを大切にしていきたいと思います。これからもどうぞよろしくお願いいたします。◆これまで、ずっと、時のしるしを執筆してくださっていた、松山献さん。ご多忙のためしばらくお休みされます。これからは交代でこの欄を担当する事になります。松山献さんどうもありがとうございました。◆歴史教科書問題。この問題はこれまでも何度も問題にされてきた、歴史認識問題の本質と同じところにあると思います。ぜひ9月9日の講演会。ご参加ください。◆センターで毎週水曜日に行っている絵画教室。先生が交代して約1年。新しい雰囲気もなじんできました。「考えながら描く」という事を大切にしてきたところ、だんだんと受講生の自己表現の場となっているようです。ひとりひとりのペースは違うので、誰もが1時間半、集中して絵を描いているというわけではないのですが、でも、「こう描こう」って考えた絵にはなんだか力を感じます。こんどの絵画展でどんな作品がみられるか、どうぞお楽しみに。（すずき）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇後援会費
年額　1口 3,000円（個人）　1口 10,000円（団体）
・郵便振込00960-0-133429「聖公会生野センター後援会」

◇自由献金・クリスマス献金
・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
・銀行振込 三和銀行 東大阪支店
普通預金　3711311「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター
〒544-0003
大阪市生野区小路東1-17-28
TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357
E-mail:ikuno.po@nskk.org
http://www.nskk.org/province/ikuno
発行人：木　村　幸　夫
編集人：大　橋　　襄

ウルリムは古紙100%の再生紙を使用しています。